

ジェイン・オースティンの小説における“walking”

真下 美和

ジェイン・オースティン (Jane Austen) の小説には、“walking”の場面が多く見られる。例えば、一人の時もあれば仲間と一緒にの時もあるが、町まで歩いて行ったり、内緒話をするために散歩したり、さまざまな場面が描かれている。一般的には“walking”といえば体の運動であり、また移動の手段でもある。しかし、オースティンは“walking”を単なる運動や移動手段としてでなく、さまざまな意味を含み持つ行為として描いている。本論文では、オースティンの小説に描かれる様々な形の“walking”のうち、一人での“walking”に論点を絞り、それがどのような意味で使われているのか考察する。

1 “manner of walking”

『自負と偏見』(*Pride and Prejudice*)の中で、上流気取りのミス・ビングリー (Miss Bingley) は、上流社会の教養ある女性についてミスター・ダーシー (Mr. Darcy) に次のように語る。

“... A woman must have a thorough knowledge of music, singing, drawing, dancing, and the modern languages, to deserve the word [an accomplished woman]; and besides all this, she must possess a certain something in her air and manner of walking, the tone of her voice, her address and expressions, . . .” (PP 39) (下線は筆者による。)

彼女は、「歩き方」を上流社会の教養ある女性の条件の一つとして位置付けている。ミス・ビングリーは「歩き方」が女性の魅力を測る基準となっていることを十分に理解していて、「自分の姿は優雅で、歩き方は上品だ (Her figure was elegant, and she walked well . . .)」(PP 56)と自信を持っていたので、本を読んでいたダーシーの注意を自分に向けさせようと、これみよがしに彼の前を歩いたりする。

「歩き方」が女性の魅力を示すものとして描かれる例は他にもある。例えば、『マンスフィールド・パーク』(*Mansfield Park*)のエドモンド (Edmund) は、

メアリー・クロフォード (Mary Crawford) がピアノの方に歩いていく後ろ姿をうっとり目で見、「なんて優雅に歩くんだろう。(How well she walks!)」(MP 80)と彼女を絶賛する。「軽快で優雅な足取り (light and graceful tread)」(MP 80)のメアリーは、活発で才気に富んだ女性であるが、機知に富んでいるがゆえに、時には少し下品な冗談を言ってしまうたり、また育ての親に対して恩知らずな人物だと受け取られるような言動をし、批判されることになる。

「歩き方」は女性だけではなく男性の魅力を測る基準にもなっている。例えば、エリザベス・ベネット (Elizabeth Bennet) は、美男子の条件の一つとしていて、ウィッカム (Wickham) を次のように絶賛する。

“... when Mr. Wickham walked into the room, Elizabeth felt that she had neither been seeing him before, nor thinking of him since, with the smallest degree of unreasonable admiration. The officers of the shire were in general a very creditable, gentlemanlike set, and the best of them were of the present party; but Mr. Wickham was as far beyond them all in person, countenance, air, and walk, as they were superior to the broad-faced stuffy uncle Philips, breathing port wine, who followed them into the room. (PP 76) (下線は筆者による。)

ウィッカムは、容姿、容貌、物腰と同じく「歩き方」においても、その他の仕官たちとは比べものにならないほど優れていて、ほぼ全員の女性の目をひきつける。人を見る目を自慢にしているエリザベスでさえ、ウィッカムの容姿や愛想のよさといった表面上の魅力に惑わされ、彼が財産目当てで婚約するような欲得ずくの人物であるのが見抜けず彼に好意を抱いてしまう。

『エマ』(*Emma*)では、「歩き方」は、「話し方」や「黙っている時の態度」と並んで紳士の条件の一つとして挙げられている。ハリエット (Harriet) が、ロバート・マーティン (Robert Martin) とナイトリー氏 (Mr. Knightley) を較べて、“He [Robert Martin] has not

such a fine air and way of walking as Mr. Knightley.” (E 45) と述べると、ナイトリー氏ほどの完璧な紳士と農夫であるロバート・マーティンを較べるのはロバート・マーティンが気の毒であるとエマ・ウッドハウス (Emma Woodhouse) がハリエットを諷める場面がある。ナイトリー氏は、彼の移動手段が馬車ではなく“walking”であることを、エマからドンウェル・アビー (Donwell Abbey) の当主にふさわしくないと常々注意されているが、彼が三十七、八歳という年齢にもかかわらず、「背が高くてがっしりとして背筋が伸びた姿 (His tall, firm, upright figure)」(E 261) で、若々しく、若い男性たちと較べても遜色がないのは、普段の運動である“walking”のおかげかもしれない。

『ノーサンガー・アベイ』(Northanger Abbey) では、女性が同じ女性の「歩き方」を絶賛する例が見られる。キャサリン・モーランド (Catherine Morland) は、通りを歩くイザベラ (Isabella) の「優雅な歩きぶり (the graceful spirit of her walk)」(NA 34) を感心して眺める。社交界に出たばかりのキャサリンは、4歳年上のイザベラのうわべの愛想のよさや流行を追った服装に惑わされて、彼女がお金のために婚約者を捨て、財産のより多い男性を選ぶ、不誠実で欲得ずくの人物であるのが見抜けなかった。

また同じく欲得ずくの人物であるティルニー将軍 (General Tilney) は、「歩き方」が女性の魅力を決める基準の一つと一般的に考えられていることを利用して、キャサリンの「歩きぶりの軽やかさ (the elasticity of her walk)」(NA 103) をほめ、彼女に対しておべっかを使う。というのも、彼はキャサリンがお金持ちであると思込み、息子ヘンリーと結婚させたかったので、キャサリンに対して必要以上に愛想よく振舞うのである。

ナイトリー氏という例外はあるが、メアリー・クロフォードやウィッカムやイザベラのように、「歩き方」が魅力の一つとなっている登場人物たちは、もっと人間として本質的な点、道徳面に問題があり、最終的には作者に批判される人物として描かれている。

2 女性一人での散歩

『自負と偏見』では、エリザベスの歩く場面がしばしば描かれており、しかも一人での場面が多い。例えば、エリザベスは病気の姉を見舞いに前日の雨でぬかるんだ道をビングリー邸まで一人で三マイルも歩き、ミス・ビングリーや彼女の姉のミセス・ハースト

(Mrs. Hurst) に軽蔑される。彼女たちの驚きぶりは、エリザベス自身にも自分がばかにされているのがよくわかるほどのものだった。陰でミセス・ハーストは皮肉たっぷりに“an excellent walker” (PP 35) であると言い、ミス・ビングリーは次のように批判する。

“To walk three miles, or four miles, or five miles, or whatever it is, above her ankles in dirt, and alone, quite alone! what could she mean by it? It seems to me to shew an abominable sort of conceited independence, a most country town indifference to decorum.” (PP 36)

ミス・ビングリーが“alone, quite alone!”と二度も繰り返して強調していることから、エリザベスが一人きりで歩いて来たことが尋常でないことが分かる。この場合、一人で歩いてきたことだけでなく、その距離も問題となっている。歩く距離に関して、オースティンは『エマ』の中で、「ハートフィールド (Hartfield) からランドルズ (Randalls) までの距離は女性の一人歩き (solitary female walking) にとてもふさわしい」(E 33) と述べているが、その距離は「四分の三マイル (the three-quarters of a mile)」(E 117) である。このことから考えると、エリザベスが一人で歩いた距離三マイルは問題であろう。歩いて来たことで美しく輝くエリザベスの顔に見とれるダーシーでさえ、同時に、こんなに遠くまで一人でやって来る必要があるのかと疑問に思っているのである。第2巻第10章でダーシーがエリザベスに“solitary walks”が好きなのかと尋ねる場面がある。その場面にはダーシーの心の葛藤が表れているとみることができる。ダーシーは、エリザベスを取り巻く結婚の不利な条件にもかかわらず彼女自身に惹かれているのだが、依然として彼には上流社会での礼儀からすると考えられないような彼女の振る舞い (つまり一人で歩くこと) は受け入れがたいのである。女性が一人で歩くという行為は、上流社会からみればミス・ビングリーの言う“conceited independence”の表れであり、田舎者の例にもれず礼儀に対して無関心であると批判されても仕方がないくらいである。当時の社会では、女性が戸外を一人で歩くことは良識あることとは思われていなかったのである。というのも「女性が一人で戸外を歩く場合、それは“sexual wandering”であると解釈されていた」(Wallace 29-30) からだ。オースティンの時代においては、『歩くこと』それ自体が男性の特権的なふるまい (大久保 147) だったのである。

このような背景があるにもかかわらず、なぜ、エリ

ザベスは“solitary walks”を好むのだろうか。ダーシーから真実を告白する手紙を受け取って以来、自らを省みたエリザベスは、一人になって考える時間を次のように見出していた。“Reflection must be reserved for solitary hours; whenever she was alone, she gave way to it as the greatest relief; and not a day went by without a solitary walk...” (PP 212) エリザベスは、一人で考え判断し行動する自由を得るために、一人で散歩をしているのである。ハンズフォード (Hunsford) 滞在中、エリザベスは、誰にも知られていない彼女だけが気に入っている散歩道を見つけ、誰にも干渉されることなく一人で散歩する。

『エマ』のジェイン・フェアファックス (Jane Fairfax) は、フランク・チャーチル (Frank Churchill) との秘密の婚約に良心の呵責を感じているばかりか、それを隠すためとって当のフランクがエマと恋の戯れを自分の目の前ですることなどもあった上に、ドンウェル・アビーでの苺摘みの時、エルトン夫人 (Mrs. Elton) に家庭教師の口をしつこく勧められたことによって、精神的な疲れがピークに達する。そして、皆が苺摘みをしている最中に、一人でハイベリー (Highbury) まで歩いて帰ろうとする。エマは、暑い真昼間にジェインが一人で歩いて帰るというのを聞き、馬車を呼ぶと提案するが、ジェインは“... quick walking will refresh me.” (E 290) と言って、一人で歩いて帰る。ジェイン・フェアファックスは、精神的に疲れ果て、“the comfort of being sometimes alone!” (E 291) を求めて、一刻も早く一人になる必要があったのである。

エレン・モアズが「田舎の散歩は、ジェイン・オースティンが、自立した女性の喜び (the joys of independent womanhood) を現わすために用いる、重要な象徴である。」(216) と述べているように、女性が一人で散歩するのは、自分で判断し行動する自由を得るために、また精神的な緊張を解いて心を休ませるためであったと言える。

『マンスフィールド・パーク』のファニー・プライス (Fanny Price) は、体が弱いので“walking”がままならない。“walking”の代わりに、体に負担があまりかからない運動として、パーク内で従者に引っ張られたゆっくりとした足取りの馬に乗ることで健康を維持していた。ファニーも一人で庭の植込みを歩くが、それに対して“independence”の表れ、つまり自分勝手なことをするとノリス夫人 (Mrs. Norris) に小言を言われる。ファニーは、敷地内の植込みのどこを歩いているかということさえ庇護者サー・トマス (Sir Tho-

mas) やノリス夫人によって把握されており、一人で村へ歩いて行く時もノリス夫人の用を足しに行くためである。そのようにファニーは庇護者の管理下に置かれていて、それは、マンスフィールド・パークにおけるファニーの居候という境遇が大いに影響している。

例えば、サー・トマスは、ファニーが財産家のヘンリー・クロフォード (Henry Crawford) からの結婚の申し込みを断わるつもりでいるのを知った時、彼女を「恩知らず (ingratitude)」(MP 216) で「自分勝手 (wilfulness of temper)」(MP 216) であると非難する。サー・トマスは泣き崩れたファニーに、“... I advise you to go out, the air will do you good; go out for an hour on the gravel, you will have the shrubbery to yourself and will be the better for air and exercise...” (MP 218) と、命令に近い助言をする。恩知らずであると思われたくないファニーは、従順であることを示すために喜んで植込みを歩く。“a part of himself [Sir Thomas]” (MP 316) と表現される、ファニーのもう一人の監督者であるノリス夫人は、ファニーが植込みを歩いていたのはサー・トマスの命令だったことを知らされていなかったのも、ファニーが自分勝手に植込みを歩いていたのだと思ひ込み、ファニーが散歩を知っていたら、自分の代わりに用事をしに家に行かせることができたのに、とファニーを次のようにとがめる。

“... there is a something about Fanny, I have often observed it before, -she likes to go her own way to work; she does not like to be dictated to; she takes her own independent walk whenever she can; she certainly has a little spirit of secrecy, and independence, and nonsense, about her, which I would advise her to get the better of.” (MP 219)

ノリス夫人は、ファニーが指図されるのを嫌がるのか、「一人で散歩 (independent walk)」をしたがると言っているとがめ、また、こっそりと事を進めたり、自分勝手に、良識のない振り舞いをすると言って腹を立てている。ノリス夫人は、ファニーに対する庇護者の立場をとっているつもりであるが、実はファニーを正当に評価しないことで自分の地位を保とうとしているのである。一方、サー・トマスは、ファニーに植込みを歩くことを勧めることによって、有利な縁組を自分勝手に断わった彼女に対し、依然として従順であるかを試したと言える。「自立した女性の喜び」を表す“walking”も、この場合、庇護者に管理されている若い女性の従順さを試すために利用されているのである。

一人で考え事をしたい時、ファニーは主にどこを歩くのだろうか。それは、ファニーの寝室である屋根裏部屋よりも「広々としていて、歩きまわったり、考え事をするのにふさわしい」(MP 105) 東の部屋である。第二巻の最終章で、ファニーは、朝食室で二人きりになったヘンリー・クロフォードから兄ウィリアム(William Price)の昇進に尽力したことを告げられた後、結婚を申し込まれる。しかし、ファニーは、彼女の従姉達を相手に恋の戯れをしていたヘンリーに対して良い印象を持っていなかった。求婚に対する返事を懇願されているファニーは、伯父サー・トマスが朝食室にやって来るのが聞こえたので、その場を去って東の部屋に避難する。彼女は「ヘンリーによる兄への尽力とプロポーズがもたらす相反する感情のために極度に混乱しながら、その部屋を歩きまわる。」そして「あらゆることを感じ、考え、気をもむ。」(MP 206) ファニーは、東の間での“walking”によって、一人で判断し行動する自由を得て、うれしい知らせ、つまりウィリアムの昇進のことだけ考え、後のことは忘れることに決める。

また、『分別と多感』(Sense and Sensibility)のリアン・ダッシュウッド(Marianne Dashwood)は、これまでの例とは異なる目的で歩く。彼女は、ウィロビー(Willoughby)に裏切られ生きる気力を無くし、戸外を「一人でさ迷い歩いた(solitary rambles)」(SS 303)結果、風邪をひき死にかけける。その死の淵から回復した後、彼女は自分の行動の誤りを悔悛し、家族共通の気晴らしや、家族との楽しい付き合いこそが求めがいのある唯一の幸福だと宣言するに至る。そして、何事にも極端に走る傾向のマリアンらしく、自分自身を向上させるために、毎日、本を読みピアノを練習するという計画を立て、他にも次のような計画を立てる。

“When the weather is settled, and I have recovered my strength,” said she, “we will take long walks together every day. We will walk to the farm at the edge of the down, and see how the children go on; we will walk to Sir John’s new plantations at Barton-Cross, and the Abbeyland; and we will often go to the old ruins of the Priory, and try to trace its foundations as far as we are told they once reached. . . .” (SS 343)

マリアンは、降り続いた雨で湿った場所を一人で歩いたために病気にかかってしまったのを反省し、これからは天気の良い時に家族と戸外を毎日歩こうと決める。

これらの計画に基づいて行動していれば、「感情は自制できるようになるし、短気もなおるでしょう。もう他人を悩ましたり、自分自身を苦しめたりはしなくなる。」(SS 347)と語る。マリアンは、自分の性質を改善する方法の一つとして、“walking”を選ぶのである。

3 ま と め

オースティンの“walking”の扱いは、ジョンソン博士(Dr. Johnson)からの影響もあると思われる。アン・ウォレス(Anne D. Wallace)によれば、ジョンソン博士は“... walking attentively ... is a good way to gather new observations for reflection and so improve one’s disposition.”(59)と考えていたようである。オースティンの兄ヘンリー(Henry)が“Johnson and Cowper were her favourite ‘moral writers.’”(Tomalin 68)と述べているように、ジョンソン博士はオースティンが敬服する作家の一人であった。オースティンは、ジョンソン博士からの影響もあって、一人での“walking”をエリザベスの場合のように考え事にふける一つの機会として、またマリアンの場合のように性質を改善するためのものとして用いているのかもしれない。

1 “manner of walking”で扱った「歩き方」の優雅さや軽やかさは、道徳的なこととは関係がない。メアリー・クロフォードやイザベラは、優雅な「歩き方」が彼女たちの魅力の一つとなっているが、それは表層的な魅力であって、彼女たちには本質的な魅力はないということが明らかになる。つまり、彼女たちには道徳面に問題があることが作者に批判されることになる。それに対して、エリザベス・ベネット、ジェイン・フェアファックス、ファニー・プライスの場合、「歩き方」については問題にされていない。彼女たちは、自分で考え判断する自由や精神的解放を手に入れるために、一人で歩くのである。

当時、「歩くこと」は男性の特権的なふるまいだったので、ジョンソン博士は“walking”に関して述べる時、女性のことを念頭に置いて書いているわけではないだろうが、オースティンは、自分で考え判断するために一人で散歩するヒロインを描いて、自分の経験から言っても女性も同じだということを示しているのではないだろうか。

引証資料

Austen, Jane. *Emma*. Ed. Alistair M. Duckworth. Boston :

- Bedford / St. Martin's, 2002. 本論文で用いた省略名は *E* である。
- . *Mansfield Park*. Ed. Claudia. L. Johnson. New York: Norton, 1998. 本論文で用いた省略名は *MP* である。
- . *Northanger Abbey*. *The Novels of Jane Austen*. Ed. R. W. Chapman. 3rd ed. Vol. 5. London: Oxford UP, 1988. 本論文で用いた省略名は *NA* である。
- . *Pride and Prejudice*. *The Novels of Jane Austen*. Ed. R. W. Chapman. 3rd ed. Vol. 2. London: Oxford UP, 1988. 本論文で用いた省略名は *PP* である。
- . *Sense and Sensibility*. *The Novels of Jane Austen*. Ed. R. W. Chapman. 3rd ed. Vol. 1. London: Oxford UP, 1988. 本論文で用いた省略名は *SS* である。
- Tomalin, Claire. *Jane Austen: A Life*. New York: Knopf, 1997.
- Wallace, Anne D. *Walking, Literature, and English Culture*. Oxford: Clarendon Press, 1993.
- 大久保謙「足と手のモダニズム—『チャタレイ夫人の恋人』論」『身体—皮膚の修辞学』東京大学出版, 2000, 133-52。
- モアズ, エレン著, 青山誠子訳, 『女性と文学』研究社出版, 1996。